

---

# コンビニから始まる妙な友情？

銀実 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンビニから始まる妙な友情？

### 【Zマーク】

Z7998E

### 【作者名】

銀実 空

### 【あらすじ】

深夜のコンビニは妙な客が多い。ってのは、一年もバイトしているから、そんなものは知っていた。でもまさか、喧嘩口調で逆ナン（もどき）をされるとは思つても見なかつた。恋愛色が強い、ラブコメ小説です。コンビニから始まつた、友情とも言えない微妙な関係をおもしろおかしくほのぼのと書いていく予定です^超！不定期更新ですが、必ず完結させますので、暖かく見守つて下さい；；；

## 第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのように始まりました（前書き）

初連載ですが、暖かく見守つてくださると嬉しいです^\_^ 是非、感想等お願いします m(\_ \_) m

## 第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのよつて始まりました

「1860円になります。お箸はお付けしますか?」

「ああ。頼む」

「こぐれ、お付けしますか?」

「1つ」

「かし」しました

今日も深夜のコンビニで、俺はおつとん相手に、営業スマイルを  
かましてこる。

俺の名前は寿拓也。「トフヰ タクナリ」タクヤではなくタクナリと読む。

今年で20歳になるのだが、仕事というもののコンビニのアルバイトのみ。俗に言うフリーターである。しかし、一ートとも違う。なぜなら俺はきちんと、『働く意欲』があるからだ。

「いらっしゃませ」

店内に入ってきた客に、また笑顔を向ける。入ってきたのは俺と同じぐらいの女性だ。

深夜のコンビニとは、なかなかおもしろいものだ。最初は給料の良さだけに魅力を引かれたものだが、今は違つところに魅力を感じる。

それは、客だ。

深夜といつのもあり、すぐ個性的な客をよく出す。例えば、18禁雑誌をじつそり買って帰る奴や、ものすごい酒臭い奴が10本くらいビールを買つていく奴。ああ そつそう。ものすごい真面目そうな男の人が、ちょっと照れくさそうに女性の下着セツトを買つて帰つたときは、さすがに驚いた。

「コツン

さつき入つてきた客が、カウンターの上にカゴを置いたのでハツと我に返つた。

「いらっしゃいませ」

そう言いながら客の方を見た。

肩ぐらこの髪をサラサラと揺らして、サングラスをかけている。タンクトップにショーパンといつらつな格好は、その人のスタイルの良さを引き立てていた。

その女性は、レジの近くにある新製品のお菓子売場の方を見ると、そこにあるお菓子を手に取り、サングラスを外した。

「すげえ美人

。

俺は思わず、動かした手を止めその女性の横顔を、まじまじと見つめてしまった。

否 見とれて、いた。

大きくくりつとした田は、存在感ばっちりな一重。スウツと通った鼻に、つやつやのグロスを唇につけていて、それだけで色っぽさが倍増する。

マイクは濃すぎない、ナチュラルマイクだったのだが、元の顔が整っているせいか、それも気にならないくらいだった。

カゴに手をかけたまま呆然としていると、俺の視線に気づいたのか、彼女がこちらを向いて言った。

「あ？ 何見てんだよ。手を動かせ。手を！」

.....。

はい？

な、何か今、幻聴が聞こえたような……

「だからーなにボサッとしてんだよ。ちやんと仕事しろよ」

その日の前にいる客は、言い終わつたあとまるでバカにするかのようにハツと笑つた。

え……つとお？

さつきの台詞、この人が言つたの…？だ、だつて顔に似合わず、ものつそい口悪い

そんな俺の混乱を知つてか知らずか、まるで田舎のヤンキーの様に立ち、（ショーパンのポケットに、両手の親指だけ突つ込み、体

を斜めにして、こちらに傾けてる状態（目を細めて俺の胸元を見ている。いや、正確にはコンビニの制服の胸ポケットにある、ネームプレートを見ていた。

「オイ、おまえの名前、なんて読むんだ?」「...ト、ブキで合つてんのか?」

「...は?あ、ああ。まあ。」

「おまえ...新人だろ?」

「いえ...違うと、思いま...す?」

「なんで疑問系なんだよ」

言い終わると、またバカにしたようなハツて笑い方をする。  
この人は、今コレがマイブームなんだろうか?  
それとも...癖?

「いや...新人かベテランかどうかっていうのは、自分で決めるもんじゃないと思うんで...」

「ほあ~。新人のくせに言ひじゃねえか」

すると今度は今までとは違う、まるでニヤリといつ効果音が付き  
そうな笑い方をした。

つてゆーか、俺は新人と見なされたのか...。このバイト初めて一  
年とちょっと経つぞ...?さつきはかつこいいこと言つたが、ぶつち  
やけ自分では、新人では無い気がするんだが...。

「ホラ、口だけじゃなく、手も動かせや

いや…喋らせてのあんただろつ！

とツツ口ミたくなつたが、従業員という立場の俺がそんな文句も言えるはずが無く、申し訳ありませんでしたと謝つてレジを続けるしかないのだった。

「合計で626円になります」

「ムニムームニムかあ～。なんかいやらしくね？626円だったら、ムニムニだぜ？」

オマエはどこの小学生だ！そんなくだらない」と、ニヤニヤするな！しかもいい歳こいた女性が～だぜつて言葉、使ひちゃいけません！！

と、心のなかでその人に、めちゃくちゃツツ口んだ。田一杯ツツ口んだ。

ちなみに、この時点でわかつた人もいるだろつが、俺をボケかツツ口ミで表すなら、断然ツツ口ミだ。だからこの立ち振る舞いといい、発言といい、ツツ口ミ所が満載な彼女は俺にとって、体に良くない。

彼女は、合計の値段を聞いてから、お釣りを渡すまでずっとムームか～。2が一個足りねえんだよなあと、ブツブツ言つていた。

俺が品物を袋に入れて、彼女に渡すと向こうは俺をじーっと見てきた。

「な、なに

「

「ねまえつひこの時間帯、いつもいるの？」

「なにか?」と、質問しようとしたら向ひいつも質問をしてきて、少し  
びっくりした。

質問の内容は、俺にとって?/?/な内容だったが、一応俺は真剣  
に答えることにした。

「そう……ですね。ほんとひこの時間ですかね……。時間があるときは、  
は、毎にシフト入れるときもありますが……」

「ふうん。まあ、私が暇なときは、また来てやるよ」

「…………はい?」

「まあ、期待して待つてな。コトブキさん」

まるで説得するかのよう、俺の肩を叩いては、満足そうにクッ  
クッと笑って帰つていった。

この日から、俺と彼女のコンビニを通した、奇妙な付き合いが始ま  
るのだった。

## 第1話・それは突然、喧嘩を売られたかのよつて始まりました（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。誤字・脱字等あつたら報告を、他にも感想・評価などして貰えるとありがたいです。（――）

## 第2話・自己紹介はすぐにしまじょう（前書き）

第2話突入ですへへ感想・評価おねがいします。

## 第2話・自己紹介はすぐこじましちょう

「エオ。コトブキさん。また会つたな！」

「またあなたですか。なに偶然を装つたようなフリをして…」

「ノリ悪いなー。ブキさんは」

「勝手に気持ち悪いあだ名、付けないでください！…それに、なーにが暇な時来る。ですか！あなた毎晩来ますよ。毎日暇つてことじやないですか」

「それを言われちゃうとなんとも言えねえよ」

そう言いながら、ガハハと笑う。

女性らしくない笑いだなーと、つくづく思った。  
元は綺麗なんだから、にっこりと笑つてれば、絶対世の中の男性殆どを虜にできると思う。

ちなみに今の彼女の格好は、レジのカウンターに両肘を付き、前めりになつて俺と会話している。

他に客がいないからいいものの、俺たち以外の誰かいたら、迷惑行為以外の何者でもない。

ちなみに店員は俺以外に1人いるのだが…。この店員がまたどうしようもない。ずっと奥に引きこもり寝ているのだ。

「この人を給料泥棒と言わずに、誰を言うのだ？」

謎の女が俺に声をかけてから、1週間が経つた。

彼女はあの日から毎晩俺のところに来て、他愛もない話をして帰る。

話の内容なんて…大したこと無いものばかり。

まあ、最初の2日間は、ずーっと彼女の質問攻撃だったのだが。

あれはすごかった。思い出しだけでも、嫌な汗をかく。なんか…転校初日から、女子に質問責めにあつてる男子の気持ちが分かつたきがした。

実のところを語つと、最初この人の相手をするのが、ものすごくイヤだった。『仕事に集中したい』とか『あんたと話してもつまらない』とか、いろいろ言いたかったんだけど、集中するほどの客は来ないし、意外と彼女との会話はおもしろくて、断る理由をすべて無くしてしまった。

この1週間、彼女と話してみて少しだけ、彼女の情報が増えたので、あげてみよう。

どうやら年齢は俺より上らしいが、細かいことは教えてくれなかつた。

それと1人暮らしをしていくらしい。しかも、俺の家から結構近いと言つこともわかつた。

.....。

1週間かけてこれだけの情報つて、どんだけこの人は謎に包まれているんだ…。

だつて彼女、自分のこと話してくれないんだもん…と心中でボケても、誰も突っ込んでくれるはずもなく、虚しい気分になるだけだった。

まあ、初めて会ったときよりか、彼女に突っ込みが出来るようになつたのは、幾分か前進したと思つ。

「なあなあ。コトブキさんも1人暮らしなのか？」

「あれ…？言つてませんでしたっけ？」

「ひ、ひどい…！私を誰と勘違いしているのよ…！」

「勘違いとかじゃなくて、あれだけすこい数の質問を一辺に聞かれたら、言つたことも忘れますよ」

「はいはい、わかりましたよー。どうせ私が悪いんですねー」

そう言つと彼女独特のハツて笑い方をする。

そうそう、ここ1週間でわかつたことと言えばもう一つ。彼女は思つた以上に、口が悪いと言つこと。

その行動や喋り方はまさに『男』と同じ。

なんてことを思い出していると、ほりー質問の答えーと言ひながら、カウンターをバシバシ叩いて、俺の答えを急かした。

「ああ…まあ。一人暮らしですけど…。てゆーか、俺のことなんで『コトブキさん』なんですか？あなたの方が年上なんだから、下の名前で、呼び捨てでいいですよ」

彼女は手を顎に添えて、うーんと考える仕草をしたあと

「それもそれだよなあ。じゃあおまえのことは呼び捨てにするわー！…………やつこやオマエ、名前なんつーの？」

と言った。

「あれ？これも、言つてしませんでしたっけ？」

「ひ、ひど  
」

「その流れはもうこいです」

そう言いながら彼女の方を見ると、唇をとがらせて、チヨツンなんて言ひそうな顔をしていた。

「俺の名前は、タクナリ拓也ですよ。タクヤと書いて、タクナリと読むんです」

「ふーん。タクナリ…ね。わかった！オマエはこれから成金だ！」

「なんでやうなるんですか！？……大体、予想は付いてるけど」

後半は誰にも聞こえないよう、小さな声でボソッと呟いた。

「タクナリのナリを取つて、成金……」

「やつぱりか……」

俺は溜息をつくしかなかつた。つーか今この場でこれ以上の、最適な行動があるなら、是非伝授してもらいたいものだ。

「せめて……お前っぽいものにしてもらひませんか?」

「じゃあ……クリリン?」

俺はここ最近で最大の溜息をつぐ。

「はあ……もつ……何でもいいです。成金だろうが、クリリンだろつが、ベジータだろうが、好きに呼んでください」 そう言つと、彼女は本日2回目のガハハ笑いをした。

「嘘だよ、嘘……もつ……そんなに拗ねないで。タクナリくん……?」

クン付けも、この歳でどうかと思つけど……なんてことを考えているとい、俺の顔を両手で挟み、グイッとこちらに向かう。

俺と彼女の顔の間、約5センチ。

「お姉さんが悪かつたら、そんなに怒らないで……?」

ものか「ぐ甘い声で、そつと囁いてきた。

多分彼女はわかつていらないだろう。めちゃくちゃ綺麗な女人の顔が目の前にあって、そんな甘い声を出せたら、世の中の男は我慢ができないということを。

俺だつて今、すくぎりのところで戦っている。

5分以上経つたかのよひに思えた。

実際にはそんなに経っていないのだろう。多分15秒も経っていない一瞬の間。でも、彼女の顔の近さとか、顔にかかる息のいやしさとか、ほのかに香る甘い香りだとか…すべてが俺の感覚を狂わしていた。

ダ、ダメかも俺　　このままだつたら…………何かしちまつ。

俺だつて男だ。こんな状況で理性が保てるわけ無いのだが、俺のプライドが許せない。

「あ、……あの」

この状況を何とかしようと、俺は必死に声を出した。

「とにかくでータクナリには、私のことも呼び捨てでいいー…という、権利を与えよーう」

『うう』のところで俺の両頬に置いてあつた手を、パシッと叩いた。

「こつて……なんかものす」ぐ、いい音したんですね」

「がははははっ！ 気にしなーー」

なんて 平然を装っているけど、ホントのところは顔は真っ赤で、心臓バクバク。頭の中ではあの甘い声が、なんどもリピートされていた。

なんだか、この人の考えていることがいまいちわからない。

叩かれた頬をさすりながら、彼女をちらりと見ると、あふれんばかりの期待に満ちた顔をしていた。

「さあほらっ！ 私のこと呼んじゃいなよーー今ならお姉さんって付けてもいいぜー！ さあ、ホーレホーレッ！」

ホーレホーレって……どこの変態おやじですか。と苦笑いしながら突っ込むと、彼女は真顔で『人間誰しも、心中に変態おやじが住み着いてるものなのだ』とさり気なく、ホラー映画にもなるようなことを言つてきた。

「それでは……」

と言つと、「ホンと咳払いをして、彼女の名前を言おうとした。

「あ……あれ？」

「ん？ どうした？」

彼女の名前が言えない。なぜか言えない。口からでてこないのだ。

それもその筈だ

。

「俺……あなたの名前、聞いてましたっけ？」

。 。 。

。 。 。

。 。 。

「あ」

セの「ハンマー」は、じゅうぶん長いが流れたところ……。

## 第2話・自己紹介はすぐこじましうつ（後書き）

読んでくださってありがとうございました^ ^ 評価・感想は作者に  
とつてかなりの励みになります。是非よろしくお願ひします m(ー<sup>ー</sup>) m 次回、タクナリのルックス、謎の女の名前、自己紹介をし  
てないと気づいてからのその後が明らかに!!

### 第3話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

1（前書き）

評価・感想を書いてくれた方。メッセージを送つてくれた方。本当にありがとうございました！！ 注：今回は途中で視点が変わりますのでご注意を…

### 第3話・人の家にお邪魔するときも、事前に連絡をこなまじゅう

1

ジリジリ焼け付くよつた暑さ。蝉が「じじやじばかにミミンミン鳴いている。

「…………」

そんな蝉に嫌気がさしタクナリは起きた。

「うつわ…汗でびっしょりじゃねえか」

自然と漏れる独り言。

こんな暑い日にクーラーも付けないで寝てりや、そつなるか…。  
と1人で納得し、時計を見る。

2時か…。結構寝たな。

うーん、と伸びをしてベッドから降りると、とりあえずシャワーを浴びに行こうと考えた。

俺が家に帰つてからするのは、とりあえず寝る。  
仕事しているときはそれでもないのだが、帰つてくるのが早朝ともあり、家に帰ると倒れ込むようにベッドにダイブするのだ。

「あひー」

寂しくなると独り言が増えるんだなー。  
なんて思いながら服を脱ぐ。

蛇口をひねつてお湯を出す。まあ実際、お湯ともいえないくらい

のぬるま湯なんだげ。

「うひゃ～気持ちいい！」

ほほ水とも言えるくらいの気持ちいいぬるま湯が、体についたべタベタな汗を流していく。

適当に体を洗って頭を洗い、脱衣所に行つて適当に服を着る。頭をバスタオルでかき回しながら、今月分の勤務表を見る。

「確か今日は……」と、やつぱりやつだ

やつ今日は、久しぶりの休み。

「おっしゃ！」

思わず決めたガツツポーズが、思つた以上にオーバーで、少し恥ずかしくなりキヨロキヨロしてしまつ。

「あ……」

川北麗華。  
カワキタ レイカ

ふと彼女の名前を思い出した。

彼女は今日俺が休みだと知つてゐるのだろうか…？  
知らない… よなあ。

そんなことを考えていると、昨日の（今日とも書つ）あの後の川北麗華の様子を思い出した。

「ハルヒは、なんとも微妙な氣まずい空氣が流れてた。

「…………

「…………

「…………

「…………

「………… ぶつ」

静けさが重なる中、俺の笑い声が沈黙が破った。

「な、なに笑つてんだよ」

「だつ……だつて……一番張り切つてたのに……ククッ……名前……言つてな  
いつて……ブツ……ば、馬鹿」

「るせえ……おまつ、それ言つた……なんか……恥ずかしいじゃねえか」

「ぶくぶく、馬鹿だ。ホントの馬鹿だ」

「笑うな――――――」

「ククッ……」

ダメだ…思いだすだけで、また笑える。

あの人あんな必死な顔始めて見た。真っ赤な顔であたふたしてて、それがまた俺の笑いを誘っていた。

つと、思い出に浸つてる場合じゃない。

「うーん……どうしよう」

多分彼女はいつもと同じようにコンビニに来るだろ。伝えに行くとしても、彼女との連絡方法が全くない。

あつ！でも確か彼女の家……。

「ま、大丈夫か」

幸いあのコンビニは、俺の家のすぐ近くだったりする。歩いて5分するかどうかという距離だ。

この前あの人気が言つていた、『彼女の家が、俺の家と近い』と言つ情報が正しければ、俺がいないと分かればすぐ帰るだろ。つてことで…。

「今日は久しぶりにのんびり過ごしますか？」

誰に言つわけでもなく、そう言つた俺は伸びをしながら、後ろのソファにボフツと倒れ込むのだった。

\* \* \*

月明かりに照らされた手書きの地図を見て、私は暗闇を歩く。

タクナリ驚くだらうなー。

今から会いに行く男の、驚く顔を想像するとつい笑いがこみ上げてしまつ。

私の名前は、川北麗華。

時刻は午前3時。違う言い方をすれば、『深夜』の3時だ。

私は今から、とあることがきっかけで知り合つた男に会いに行く。

その名も寿タクナリ。コンビニでバイトしているところを、私が絡んだことから始まった。

なぜ私がタクナリの家に行くのか。事の発端は、ほんの数10分前だった。

「ええ！？タクナリいねえのかよー！」

「はつはい。寿さんは今日休みですけど……」

「まじかよ……」

驚いた。いつものようにコンビニに行くと、タクナリの姿はなく、代わりに清楚なイメージを持った女性店員がいた。

「あ、あの…寿さんとせじかこひ…」

「うえつー…?」

そんなことを聞かれるなんて思つても見なかつたので、私は思わずすっとんきょんな声が出た。

彼女が言いたいことはわかつた。とにかく『せつせから妙に親しげだけど、寿さんとはどんな関係なんじゃいーー』と言つことだろう。

よく見ると彼女はまるで、私を威嚇するかのように睨み付けている。

「ほおーん」

「なんですかーー!?

「いや別にーー」

やうこひとか…。ここつ…タクナリに惚れてるな?

私は思わず耐えきれなくなつて、クックッと笑つてしまつた。

「ひー?バカにしてるんですかー!?

彼女の声が「ンンビ」に響き渡つた。

おおひ。うわーー

予想外の反応に、呆然としている店員さんは、我に返ったようにハツとした。

この人はアレだね。興奮すると前が見えなくなるタイプだね。

1人でうんうん、と納得していると店員さんは焦ったように声をかけてきた。

「ど、とにかく…！…どんな関係かも分からぬあなたに、寿さん  
の詳しいことは

「アレ、あんた」

おは?

女の店員さんの声にかぶつて、聞いたこと無い低い声が聞こえた。

あんた： 確か：

「いつも寝てる店員ーつー！」

「それで—す」

私がちょっと興奮して言つと、無表情でピースを作つて出てきた。

「ちよつ……新田せんつ一否定してくださいよ」

「だつてホントのじだもーん」

また無表情。どうやらこの人は、感情を表に出さないらしい。

「ニッタ… かあ。へえ… 」この人ニッタって言つんだ。そういうえばタクナリもそんなこと言つてた気がするな…。

「そう言えば新田さん。このお姉様のこと、知つてゐみたいでしたけど…」

「ああ… なんか、寿が言つては、親戚らしきぞ」

……?

親、戚?

「そうなんですかっ！？」

女性店員が、もの凄く怖い顔で聞いてきた。

ああ。そうだった。すっかり忘れてた。

実は私とタクナリで、いつものように会話をしていると、レジの奥にある扉からニッタが出てきたときがあった。そのとき、ニッタが私たちの関係を聞き、苦しそれに出了答へが、そう『親戚』。

彼になぜ嘘をついたのか聞いたたら、『ひとつね…』と言つて、いたのを覚えてる。

まあ、そういうのなら仕方ない。

私は心の中でニヤッと笑つと、小さく深呼吸をする。そして、店員2人に軽く頭を下げる。

「先ほどは失礼いたしました。ここにタクナリがいるものと勘違いをしていたので、少々取り乱してしまいました。」

「はあー…？」

私の態度が急変したからであろう。女性店員が女らしくない顔で言つてきた。

「さきほど、ニッタさんが仰つた通り、わたくし私コトブキタクナリの母方の従姉妹、川北麗華と申します。」

そう言つて私は、にっこりと微笑む。

よし！完璧！

「実は最近、ijiが仕事場だと言うのを知りながら、タクナリに会うためにこの「ノハビ」に足を運ばせていただきました」

「は、はあ…」

「ジタの方は表情を一つも変えなかつたが、この際女さえ騙せばいいこと思つた。」

「といいますのも、iji最近、コトブキ家を含んだ私たちの家系で、少しトラブルが起きてしまいまして…。そのことでタクナリに話があつたのですが、あるじことか彼の携帯電話の番号も知つておらず…。迷惑とは分かつてていたのですがここをお借りして、話をさせていただきました。……ごめんなさい」

ijiいう場合は、泣いちゃダメ。オーバーになると嘘くさくなる

から、シヨン…と落ち込む程度が、いい。

「いえっそんな！私も知らなかつたのが悪いんです。」

ほーら、ノッてきた。

「いえっ…あなたは謝るよつな」としてません！なので…謝らな  
いでください。……それで、一つお願いがあるんですが…」

「なんでしょう…？」

「実は…今すぐ彼に、伝えなければならぬことがあります。夜  
中といふのは分かつてゐるのですが…。彼の…電話番号か何か、教  
えていただけないでしょつか…？」

やう言ひと私は、申し訳なさを含んだ微笑みを見せた。

人間なんて単純で、ちょっと詳しいこと話して、いい子を演じれ  
ば簡単なのだ。

数々の修羅場をぐぐつてきた私に、怖いものなんてないっ！！

でも…まさか住所を教えてくれるとせ、思つてもみなかつた。

しかも教えてくれたのはまさかのニッタ。

ニッタが言つには『今なら寝てゐるかもしないから、直接家に言  
つた方が早い』と言つことらしい。

ニッタは私の演技に、氣づいてたと思うの…。うん、あいつはあ

の女と違つて話が分かりそつだ。

なんて考えながら歩いていると、田地の建物を見つけた。

「ほおー。あいつ、フコーテーの分際でマンションに住んでるのか  
よ。」

皮肉を含んだ独り言を漏らしながら、タクナリの部屋に向かって歩く。

タクナリの部屋は一階りしく、そんなに時間もからずに着いた。

ピンポーン

インター ホンを鳴らしてみると、反応がない。

もう一度。

やはり反応がない。……ことは、寝てんのか。

「それ、必殺技！呼鈴百連発ウウウ……」

一応夜中だから、それなりの小さな声で言つた後、かなりの速さでインターホンを鳴らした。

お？なんか中から音が聞こえた。

私はインター ホンを押すのをやめ、扉の向いの廻の音に集中した。

ガタッガタガタッ、ドンドンドンドン…

音が大きくなつてゐるから、じつに向かって歩いて歩いてゐんだらうな

ん？音が止んだ。

と同時に扉が開いたので、私はびっくりして1歩下がる。

「つむせえ…。静かに寝かせろよ。なんであんなに鳴りしてんだよ。必殺技かってー…の？」

「こよひーー」

なんだか物凄く不機嫌そうだけど気にしない。私は扉を半分まで開け、立ち尽くしている彼に満面の笑みで挨拶を

バタンッ

閉められた……？

目の前の彼…正確には、扉の向こう側にいる彼は、私の挨拶に返事もせずに勢いよく扉を閉めた。

さすがに…この時間に家に行くのは迷惑すぎたか…。うーん。いらっしゃタクナリでも怒つたかな…。

なんて、滅多に感じない罪悪感を感じていると、また扉が開いた。

「なに…やつてんすか…」

ものす”ベリアルな反応をしている彼が、どうしようもなくおか

しくて私はつい笑ってしまう。

「いや… 笑つてないで。答えてくださいよ」

「…。ああ、わりいわりい。とりえず上がらしてもひづる」

タクナリの抵抗を無視して部屋に上がろうと思つたら、扉の前でタクナリが『通せんぼ』した。

「いつのまにか、やはり彼は男なんだなあ。とつづくと思つ。

いつもはカウンター越しだからわからなかつたが、こう見るとかな  
りの長身。

「ちよつと… 通らせろよ。外蒸し暑いんだぞ」

「俺の部屋もクーラー点けてないから、外とあまり変わりません。」  
「なんでここにいるんですか？」

「なんでクーラーねえんだよ。この貧乏人！！」

「貧乏人は否定しませんが、クーラーはちゃんとあります。点けてないだけです。どうしてこんな夜中に、いるんですか?」

「あるなら点けりやーークーリーはオブジHじゅねーんだぞー使い方間違えてんじや……こひやひやひやひやひやーー」

気づけばタクナリは私の頬を両手で掴み、引っ張っていた。

「てゆーか、タクナリものす」<sup>1</sup>笑つてんだけどーー逆に怖いんだけどーー。

「俺の質問に、答えてくれやー」

「はい…答えるので、手をはじゅして、くだしゃー」

私が涙田になりながら訴えたら、彼は呆れたよつに溜息を付きながら、手を離してくれた。

「で?どうしたんですか?」

「そのよきに、とつやつーー

「いい加減にしろーーーーー

タクナリの罵声が、深夜の住宅街に広がった。

### 第3話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう

1（後書き）

意外と長くなつたので、さりげなく次回に続いたりします。ほんと…行き当たりばつたりで書いてるので＾＾；あ！感想、評価お待ちしてます＾＾ メッセージではお返事できませんが、評価欄（？）のところに書いてくれれば、ほぼ100%の確率で返信しますので…。ではでは…！

## 第4話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう 2（前書き）

感想・評価、並びに誤字・脱字等の報告お待ちしています^\_^

私って誉められて伸びるタイプなのかなー、と思つた。

いや、それとこれとは関係ないのだろうけど、おもろいきり怒られるより、優しく怒られたほうが…なんつーか、結構『来る』。

「うーん、まあ俺が何も言わなかつたのは、悪いと思つてます」

ああー…もうそうゆうひつ」と言われると、むりに罪悪感がつ…だつだから、頭を下げるなあ！

あの後タクナリの部屋に無理やり入つたのはいいものの、入つて5秒もしないうちに捕まり、私は全部自白した。それを聞いたタクナリはすぐに説教モードに入ったのだ。

その怒り方は本当に反則だと思つ。ほほ『説得』に近いものなのだ。  
「あなたは女性ですから、この時間にこの辺りをうろついてゐるのは大変危険なんです」

「はー。…『めんなさい』

私がそういつと彼は小さく、『ふう。』と息を吐き、

「わかつてくれたならいこですよ。では、この話はおわりにしましょ

と言つた。

「え…？」

私は意味が分からず、聞き返すとタクナリはこつこり笑って、私に言ひ。

「いつまでもグチグチ言われるのは気分が悪いでしょう。もちろん俺も嫌ですし…。だからきちんと区切りをつければ、気持ちの切り替えもしやすいでしょう?」

なんつーか、タクナリはずご」と思った。

「おまえ…良い父親になるよ…」

「はあ？」

だつて、本当に思つた。だから私は素直な感想を言つた。

タクナリは意味がわかつてなかつたらしく、頭の上にたくさんの『?』をつけていた。

「そついえば…なんでタクナリ、上半身裸なんだ?」

さつきまではあまり氣にしてなかつたけど、落ち着いたらタクナリの格好が気になつた。

彼はジヤージのハーフパンツを履き、なぜか上半身に何も着ていなかつた。

こつして見ると、『男の人の体』つて感じだ。

「え…ああ、さつきも言つたと思いますけど、俺クーラーだけないで寝るんですよ。だからいつも寝るときになると暑さ対策で脱ぐ

んです「

「ふう～ん。私はてっきり、それで誘惑をしているのかと…」

「そんなわけないでしょ。それに誘惑できるほど見た目よくないですよ」

そういうとタクナリは、ハハッと笑う。

うーん。自覚が無いだけなのか、社交辞令で言つたのかは分からぬけど、かなり美形のレベルに入ると思うんだけどなあ。  
背だって高いし、顔は整ってるし、乙女心分かってるつづーか…。  
実際に、バイト先の子がタクナリのこと好きっぽかっただし…。  
ま、こいつは氣づいたやいねえんだろうな。天然っぽいもん。

「それで…？」の後どうするんですか？」

タクナリはキッチンにある、冷蔵庫の中の牛乳パックを取り出しながら私に聞いた。

私も喉渇いたからあとで貰おー。

そうそう。後、タクナリの家は意外と片付いていた。

まあ、部屋の造りは居間にキッチン。それと、襖で区切られていて分からないが、多分寝室だらう。あとはトイレに風呂…と至つて普通のマンションだったが、部屋そのものはものすごく綺麗に片付けられていて驚いた。

ちなみに今私がいるところは、居間だ。2人掛けのソファーがあり、その向かい側に机、その奥にテレビ。と、並べてある。

「んああ。泊まらせてもいいわ」

「ふつー?」

「汚つーなに吐いてんだよ…」

彼は飲んでいた牛乳を、おもこつきり吹いた。

「だつて…なに吐つてるかわかってんすか?」

「ああ。わかつてるよ。私はそこまで馬鹿じゃない

「はあ…。家、近いんじやないんですか?」

「ん~確かに近いけど、こんな夜中に外を歩くより、タクナリの家に泊まつたほうがよっぽど安全だと想つんだけ?」

「あなた…最初からそのつもりだったでしょ?」

「ああね?でも不思議なこと、アヤウセハシード買つた下着セットがあるんだよな~」

「バリバリ泊まるきじやなこですか…」

タクナリは溜息をしながら呟く。  
まあ、否定はしないけどね。

「それと、私は納得がいくってない」とあるーー。」

私は思いだしたように、唐突にタクナリに講義に出た。実際、本当に今思い出したんだけど。

「なんですか？」

「せつかく昨日、私を呼び捨てにしていい。と言つ権利を『えたのに』、わつきから名前で呼んでいな『じやないか！…』」

「そうなのだ。今思えば今日会つてから、一度も名前を呼ばれない。いや、呼んでくれない。

無意識なんだらうけど、ちゃんと言つておかぬきや！」

「別に… そんなこと…」

「そんなことはなんだー！！人間は皆、平等でなくてはならない。それなのにどうして私だけ名前で呼んでいるんだ？おかしいと思わないか！…」

「わかりましたよ…麗華、さん？」

「さんはこらないーー！それに、なんで敬語なんだ？別にタメ口でもいいのに…」

「それはダメです」

「なんでだよ」

「俺は例えどんな人でも、年上の人には敬意を表すよつとしてるんです」

「なんだそれ。誰の教えた?」

「俺の母ですよ」

そう言つた彼は、どこか悪戯好きな子供のような、口を両端につけて笑つた。

初めて…そんな顔を見せた彼に、ドキッとしたのは私だけの秘密だ。

「あ…そうそう。コレ、どうぞ」

思い出したようにタクナリが言つて、私の元へ白い物をボフツと投げてきた。

「んあ?バスタオル…?なんだこれ」

「この時期、いくら夜でも外歩いたら汗、かきませんでした?だからシャワーでも浴びてサッパリしたらどうですか?」

「おおーおまえ、なかなか良い」と囁つて、ねえか

そんな言葉を聞くと、彼はクスッと笑つた。

「んー…おつきいかな…」

なんて咳きながら、タクナリは襖の向こうにある洋服ダンスをあさっている。

ちなみに襖の向こうは、私の予想通り寝室だった。

私はそんなタクナリの行動を、バスタオルを抱えたまま遠田に見ていた。

「すいません。寝間着になつたなの、これくらいしかなくて…」

やう言しながら、ジャージとTシャツを持ってリビングに戻つてく。

「いや、なんでもいいです。」の際全裸でも平氣です」

「いやいや。それはやめて下れ……」

「がはははー嘘だよ、嘘」

そう言つて笑つて、タクナリは赤くなりながら、綺麗に畳まれた洋服を渡してきた。

「つたくもう… そつゆつ『冗談はよしとください』。あなたが言つて、冗談に聞こえないんですよ」

「んだと、口ア。そんなに私が常識無いように見えるか。そんなに私がエロテロリストに見えるのか…！」

「見えます。それもかなりリアルに」

「なんでだよ、口ア。私はエロテロリストなんかじやねーよ。私は変態であつてエロテロリストじやない！私は変態なんだ！エロテロリストなんかじや

」

「どつちも変わんねーよーしかもあんた変態なんですか！？」

「おう！泣く子も黙る、隠れ変態だ」

「そんな『隠れ』聞いたこともないですよ！全然リア感、感じないんですけど」

「がははははー見つけた奴は、絶望感を覚える」

「ホントに何の役に立たない変態だなー」

「いやあ…タクナリはおもしろいなあ。ちやんとかまつてくれれるから、ボケがいがあるつてもんよ」

「麗華さんがむちゅくちゅな」と呟つかひでしょ。「まあ…嘘だと思つてしまひたけど」

タクナリは溜息をつきながら言った。

「そんな」とよりシャワー、いいんですねか？」

「おわーーすっかり忘れてた」

そう言ひながら立ち上がると、彼はちょっと待つて下を。と言  
い、タオルを渡してきた。バスタオルより幾らかか小さい、普通の  
タオル。

「んだこれ。バスタオルないせつとき貰つたぞ」

「違います。それ、体洗つときに使つて下を」

「なんで？」

「一応浴室にて、体に関するありますけど…俺が使つてゐやつんで…。やつぱりそつそつみうの女性は気にするかなーって」

そんなこと…全然考えてなかつた。いやあ…タクナリすごいなあ。  
気が利くよな。めちやくちや。

「じゃあ…お言葉に甘えて、使わせていただきます」

そう言いながら、私が軽くお辞儀すると、彼もつられながらお辞儀をし、いえいえ。と笑つた。

案内された脱衣所へ行き、服を脱いでカゴに入れると、浴室のドアを開ける。

おお。意外と綺麗じゃねえか。浴室は白を基調とした、落ち着いたイメージでこゝも違つ部屋と同様に、綺麗に片づいていた。

適当に頭を洗つてから、先ほどタクナリから借りたタオルを濡らし、軽く絞つてからボディソープをつける。

ソレで体を擦りながら、せっかのタクナリの言葉を思い返していった。

『シャワーでも浴びたりどうですか？』

『女性はそういうの気にするかなーって思つて』

優しいよなタクナリは。

自然と笑みがこぼれた。

あいつは優しい。いろいろな所に気が利く。だからモテるんだもん。  
な……。

なんだか

「変わつてねえな。昔から……」

静かに囁いた言葉は、シャワーのお湯が床に打ちつけられて出来る  
音に似ず……綺麗に響いた。

\* \* \*

トントントントン。

微かに聞こえる音。それは何かを打ちつけられたような音。

トントントントン。

でも不思議と嫌じやない、どこか暖かみのある、懐かしい音。

トントントントン。

その音が、包丁で食材を切つてこする音と並びの音は、しづらか  
掛かった。

ああ そうか。昔、朝起きるとこんな音してたっけ。こんな音、  
どのくらい聞いてなかつただろう? そういうや、そもそも誰がこの音

を鳴らしているのだろう？第一俺は1人暮らしで……ああ。そうだった。昨日麗華さんが俺の家に泊まつたんだっけ……。じゃあ麗華さんが？

俺は眠い頭をゆつくりと持ち上げ起きた。キッチンの方に目を向けると、1人の女性が立っていた。

やつぱりか…。

俺の予想を見事に裏切らないで、そこにいたのは麗華さん。なにやら作つてゐらしく、鼻歌なんて歌いながら、手を動かしていた。

俺の気配に気づいたのか、体を後ろにクルッと振り向かせて俺の姿を発見すると、眩しいくらいの笑顔を俺に向かた。

「おおーーーと起きたかーーもう世界はどうくに動いてるだーー」

「まじっすか…。今何時ですか？」

「えーーと…もう一ーー時になるな」

「うわー。すいません…。麗華さん、何時くらいに起きました？」

そう言つと彼女は豪快にがはははと笑う。

「気にはんな。私もむつき起きたばかりだよ。待つてろーー今私が朝飯、兼、昼飯作つてるから。にしても…タクナリの冷蔵庫なんも入つてないのな。スーパーまで買いに行つちやつたよ」

「ええ?なんか…ほんとに迷惑かけてすみません…」

「いいんだよ、別に。私はお礼がしたいだけ。迷惑かけたからな…。タクナリの寝床奪っちゃったし…」

まあ確かに彼女を寝室のベッドに寝かせ、俺はソファーに寝た。だけれど、それほど迷惑じゃなかつたし…。

そう言つと麗華さんは、

「いーや、それ以外に私は迷惑かけたし、それに私が作りたいんだよ。だからタクナリは私の料理を、おいしいと言つてくれるだけいいんだ」

と、麗華さんは口の端を上げ、一ヒビと笑いながら言つた。俺もそれにつられ、笑つてしまつ。

「なんか…手伝ひとありますか？」

立ち上がりながらそつと言つてキッチンの方に歩き、麗華さんの隣に行く。

「いい！いい！タクナリはなんもするなつ。お礼の意味がなくなんだろ？……顔、洗つて来いよ。まだ寝ぼけたツラしてんぜ？平氣だつて。こつ見えても私、料理上手いんだぞ？」

確かに、彼女はすぐなれていたようだつた。普段料理を全くしない俺が手伝つても邪魔になるだけだと思い、素直に言葉に甘えることにした。

「わかりました。俺は出来上がるまで待つてます。そのかわり…美

味い料理、お願ひします

笑いながら言つと彼女は持つてた包丁を俺に向けた。

「上等だよ」

いや、あぶないです、普通に。

確かに麗華さんの料理は美味かつた。パスタとサラダだったのだが、パスタは高菜と梅干しの和風パスタで、サラダは自分で作ったフレンチドレッシング、両方ともすごく食べやすかつた。

「あ～腹いっぱいになつたー」

そう言いながら麗華さんはソファーにボフツともたれ掛かる。

「いや、でも驚きました。麗華さん、あんなに料理上手だつたんですね」

麗華さんは嬉しそうに笑つた。

「だろお？私結構自信あるんだよつ。つつてもせつきのは、ホントに簡単なやつだつたけどな。タクナリは料理しないのか？」

「俺は全然。料理とか本当に苦手で、できませんね。いつも外食とか、弁当とかで済ましてますもん」

「ふーん。そうなんだあ」

そういつと彼女はうーんと伸びをした。俺はそんな麗華さんの横に座り、  
「に座り、

「時に麗華さん、『これからのお予定は?』

「ん~? なーんもなーい

「じゃあちょっと、『ホート』しません?」

もちろん、深い意味なんて無い。それは麗華さんもわかっている  
見たいで

「おっ! いいなあ。ちょっとくら外出で遊ぶか

なんて、オヤジ臭い」とを言つて、

## 第4話・人の家にお邪魔するときは、事前に連絡をいれましょう 2（後書き）

次回、2人のデート編です。相変わらず大きな事件はなく、またりなデートになる予定ですw あと…この小説の題名長いから略したいんだけど…いいのが思いつかない（泣 ただ今、「コンビニ」の呼び方募集しています！^ ^ ;笑

## 第5話・テートは計画的に待ち合わせ編～（前書き）

更新が遅くなってしまい、大変申し訳ありません……」のよう  
に、何か用も空いてしまつたりとかなり不定期更新となります  
が、必ず完結させるので、どうか暖かい目で見守つて下さると幸い  
です。

## 第5話・デートは計画的に待ち合わせ編

穏やかな風が身を包み、上を見れば澄み切った青空が広がっていた。

『デート日和ってやつかな。』

そんなことほんやり考えながら、俺は麗華さんの姿を探す。

そう、ここには地元の駅前で俺はまたに、ここで麗華さんと『待ち合わせ』をしているのだ。

どうしてさっさまで一緒にいたのに、待ち合わせをしなければならないのか。そのことをまず説明しなきゃいけない。俺の当初の計画としては、自分の車に麗華さんを乗せて行こうと考えていた。しかし、麗華さんに行きたいところを聞くと『駅前をぶらぶらしたい』ということなので、駅前ならば移動手段は徒歩の方が断然楽なわけだが、それでは質問の答えになつていない。じゃあ何故、わざわざ一緒に来ないで待ち合わせをしているのか…。

それは麗華さんがある提案を出したのだ。

「なあなあーどーせならちゃんとした『デートっぽく、待ち合わせをしようぜーーー』

「待ち合わせえ? 何でそんな面倒臭いことを。別にいいじゃないですか…。このまま行つてしまつても

「つたくよお。おまつ…それでも男か?乙女心が分かつてねえつーか…麗華心がわかつてねえつーか

「なんすか… その『麗華心』つて…」

「んあ?だから私の心を掴むつーか、ソレ… キュンともなるよ!つな  
」

「あああ、わかりました。わかりました!んで、話しつきますけど、  
なんで待ち合わせがしたいんですか?」

「いや…恥ずかしい話、私デートで待ち合わせってしたことがない  
のよ。だからさ『1』つめーん。待つたあ?』『いや、今来たとこだ  
よ』つて言つ待ち合わせに憧れてたりするんだよなー」

麗華さん一人で、カップルの寸劇をやつているのを見て、器用だ  
なーと関心してしまつ。

でも…一応『デート』ならば、

麗華さんも、昨日の服のままじゃ嫌だろつ。

それに、女人は男と違つていろいろ準備とかあるだひつ。

「わかりました。さすがに今すぐつてのはじくらなんでも急ぎすぎ  
ましたね。時間もありますし、一度家に戻つてから出直しましょう!つ

「つてことは、待ち合わせだなー? つっしゃあー もちろん、『  
『つめーん、待つたあ?』『うつん、今来たとこだよ』つて流れは  
絶対やるから!』

「いや… わたしの粗つてやるもんじや…」

「やひなわや ロス」

あの時の麗華さんは、今まで見せたことが無いくらい、恐ろしい表情をしていた。結果的に何が言いたいのかといつと、この待ち合わせは麗華さんの理想なデートを演出するためにやっているのだ。

「おーい、タクナリー……」

思考が完全に回想に入っていたので、自分を呼ぶ声にハッとする。声がした方に目を向けると、麗華さんらしき人がこちらに向かって走つてくるのが見えた。

「ハア…ハア。つ、疲れた」

「別に走つてこなくていいんですよ、俺逃げませんし」

俺は少し苦笑いしながら、目の前で手を膝に付き息を切らしている麗華さんに言うと、彼女はキッと俺を睨み付け、胸ぐらをつかんだかと思うと、ぼそぼそと話始めた。

「おめえ、バカだろ。待ち合わせつーのはなあ、遅れた奴が待たせてる相手の名前を呼びながら、走つて来るつーのが、基本だろうが。常識よ?」

「ビリの国の常識?」

「ぬつせーな。細かいこといちいち気にしてんじゃねえよ」

なんだか、どうでも口悪くなつてない？君。

つてゆーか…麗華さん、ドラマとかアニメとか見すぎじゃないか？確かに、テレビとかで流れていくようなものは、麗華さんの言うとおり『――』なんて、走つてくるけど普段ではやらないよ？実際さ、見て。麗華さんが大きな声で、俺の名前なんて呼ぶから、周りの人に注目されてるし…。

なんて言葉が喉まで出かかったが、なんとか飲み込んだ。これでまた変なこと言つたならまた、麗華心がなんちゃらかんちゃらとか、言われるのは田に見えていた。

そんなことを考えていると、いきなり彼女が『そーだつ』なんて言い、首元にある手を離した。

いきなり手を離すので、その反動で少しそろけていると今までに聞いたことがない様な、すごい高い声…つまり物凄いぶりっこをして彼女は言った。

「いじめーん、遅れちやつて。待つたあ？」

ついでに言つなら、彼女は顔の右側に手を上げて…本当にマンガの待ち合わせシーンで女の子がしそうなポーズをして来たのだ。

「えー…と、取り敢えずそのわざとらしいポーズをやめてくれませんか…」

俺が呆れつつ、彼女の手を無理矢理降ろす。

「は？ なんで……？」

「いやいやいや。俺、そのポーズを待ち合わせの場面で、本気で使う人初めて見ました」

「つまり……一般的待ち合わせで、こんなことはしねー。そういうの」とか？

「まあ……わうわう」と。

「なーんだ。せっかくここに来る前に、コンビニで少女マンガ漁りまくって、研究したのによ」

「そんなことしてたんですか…」

俺はもう呆れることが出来なかつた。

「じゃあ気を取り直して、もう一回。」「うめーん。遅れちゃつ」

「ストーリー…そのことで麗華さんにお話があるんですけど。なんでそんなぶりっこな声で言つんですか？」

「うう言つたほうが、タクナリも答えやすいかと…」

「逆に答えてられないですか？ 普通に、今までと同じ口調でいいんですよ。じゃないと俺もひとつも言つてられないんです…」

「 もう…か。じゃあ、またまた気を取り直して」

「うう~と、麗華さんは軽く咳払いをし、いつものような恥じらいの「カッ」とした笑いを俺に向けた。

「待たしちまつて悪いな。……待つたか？」

少し顔を赤らめて、言つ。あー、ダメですよ麗華さん。その顔は反則です。そんな顔されたり…ねえ？我慢が出来なくなるじゃないですか。

俺は彼女に向かつて、多分、今まで見せたことが無いくらいの笑顔で言った。

「ええ、とつても」

「テメエ、話が違えじゃねーかこの野郎…！」

「イタタタタタ…あのセリフ通りには言つてないじゃないですかー…」

「ぱつーおまつ、普通そこにはあーゆーうつなセリフこう所だらうがよーお読みよクソー！」

「ごめんなさいーちょっとからかいたかっただけなんです。悪気はなかったんです。だからお願ひ、そこはつねらないでえええーーー！」

「ども、つねられたかは、みんなの想像に任せや。

## 第6話・テートは計画的に買い物編

とりあえず、麗華さんは怒らせたら怖い。とゆーか痛い。これからはあまり、からかわないようにしようと学習した、寿君でした。

今久しぶりに俺の名字が出てきて、びっくりした人がいるだろう。最近麗華さんに『タクナリ』って呼ばれているからみんな忘れていると思うが、俺の名字は寿だ。忘れないようにしてくれ。

なんとか麗華さんを落ち着かせることが出来、（興奮させた原因は俺なんだけど）気が付くとかなりの人に注目されていた。

それもそうだろう。麗華さんが来た時点でかなりの人の好奇心を集めていたのだが、そこからの俺達の言動、最後にはあんな戦闘まで繰り広げていたら、人間以外の動物だつて興味を持つに違いない。

さすがに俺と麗華さんも恥ずかしくなつて、逃げ込むように近くのカフェに非難した。

俺達が逃げ込んだカフェは駅前にある小さな店で、なんとも女性が好きそうな、可愛らしいお店だった。

店内に入り、俺がアイスコーヒー、彼女はアイスティーを頼むと、注文したものが飲み物だけだったので、すぐに来た。

俺の元にアイスコーヒーとミルクとガムシロが一つずつ。麗華さんにも同じく、アイスティーとミルク、ガムシロが一つずつ置かれた。

んー…俺ガムシロいらなんだけどなー。

俺がミルクしか入れないのに気づいたのか麗華さんが、話しかけ

てきた。

「ガムシロ……使わねーの？」

「あ……はい。……使いますか？」

「おう！……私甘党なのセー！」

そう言いながら右手をヒラヒラさせる麗華さん。

うーん。それっぽいっちゃそれっぽいし、ぼくないつたらぼくな  
いな。

力チャ力チャとストローでかき混ぜながら、俺はふと疑問に思つ  
たことがあった。

「そういうや、俺の家の場所誰に聞いたんですか？」

麗華さんが俺の家に来るのは初めてだつたのに、なぜか場所を知  
つていた。麗華さんは昨日コンビ一人に教えてもらつた。としか言  
わず、俺はそのことを聞こうと思っていたのだが、なかなか聞くタ  
イミングがわからず（ただ忘れていただけ）いつ聞こうか考へてい  
た。

「ああ。名前……なんだっけなー？覚えてねーなー」

「なんかこう……特徴とかありません?」

「特徴なら覚えてるぞ！一人がだな……ロングの髪を一つに結んだ、  
小さくて、空気の読めない女の子。」

「空気の読めない……？」

「そりゃ。他にも、興奮すると前が見えない女の子。とか、恋する純粋な女の子。とかそいつはいっぱい特徴があつたな」

「ん~? わかんないなあ…。」

「あの女、可哀相。タクナリに覚えてもらえないで…よっぽど影が薄いんだな」

「そりゃ麗華さんは、彼女の癖もある、ハツと言ひ笑い方をした。

「そんなこと言ひちやダメですよ。俺の記憶力が悪いんですから」

「いやいや、色んな意味で可哀相だと思ひぞ~私は」

「そりゃ言ひとくッ」と笑う麗華さん。

本当に楽しそうに笑つてゐるな、この人は。

「……で、その人だけだったんですか?」

「んああ。もう一人がーあいつだ。ほら、この前一回私が見かけたことある、いつも寝てる奴!」

「ええ!~新田さんですか?」

「そりゃシターヤーと思つた。そいつだよ」

「あの二ッタさんが…。つーかあの人起きてたんだ」

「いや、多分トイレで起きてたんだと思う。だつて私に地図書い

てくれたらいちから走って、トレイの中入ってたぜ

「そんなことだらうと思つてこまししたよ」

「でも…ひとつ気になることがあるんだよな…」

「はい?なんか言いました?」

「いや、なんでもねえ」

もうひとつ、麗華さんはがははははと笑う。でもいまいち意味がわからない俺は笑うことは出来なかつた。

しばらく他愛もない話をした。いつも「ンビー」と話すときとせ、時間も場所も違つせいか会話の内容も大分違かつたのがまた新鮮に感じて、飲み物一杯で随分と長居してしまつた。 店員にすればすく迷惑な話だらう。

「うつわ。結構喋つたな。もうこんな時間だよ」

麗華さんの言葉に反応して、店内の時計を見ると店に入つてから一時間近く過ぎてこた。

「そろそろ行きますか。店員さんの視線も怖くなつてきましたし」

「あー…確かに、な」

もうひとつ麗華さんは、じりかおもじりつつ、ハツと笑つた。

さて、場所は変わって先程の待ち合わせ場所に戻った俺たちは、次にどこにいこうかと考えていた。

「うーん…」

『デートに切り出したくせに、何も考えていなかつたことに少し後悔。ただ単純に、麗華さんといろんなことを話してみたいと思つたので『そこら辺、ブラブラするぐらいでいいかー』といつ甘い考えでいた俺は、今の状況は少し焦る。

最近は『女性とデートをする』なんて生活とはかけ離れていたせいか、デートと仕方なんてすっかり忘れていた。

余談だけど、俺は中学3年から高校2年にかけて、人生誰しも一度は経験するであろう『モテ期』で、かなり調子にのり、いろんな女の子とつかえひつかえした時期があつた。言つてしまえば、その日だけ。つまり、ベッドの中で一夜過ごしたらポイなんてことも、何度かあつた。まあ、その浮気癖がたたつて、高校3年になつてからは、女の子との付き合いはめつきりなくなつたんだけど。今俺がこうして普通に思いだせるのも、俺自身が充分、後悔や反省を繰り返したからだと想つ。

話が大分逸れたけど、俺が言いたいのはその『モテ期』に比べたら、女性の扱いが全然慣れてないということ。更に話を縮めると、やつぱり俺は困つて『うーん…』と言つこと。

『うーん…』になると、少しばかり丽華さんを見習つて、コンビニなどどこかで『デートマーコアルみたいなのを、読んで来るんだつた。

「なあ、もしかして行くところ迷つてる。って感じかい？」

まさかの図星をつかれてドキッとする。でも、変に嘘をつく必要もないのに、素直に答えることにした。

「あー、まあそんなんといいです」

ハハハと苦笑いしながら答えると、麗華さんは『じやあー』なんて言つて俺にある提案を出した。

「おー、これも安いなあ

え、えーと……。

「安い安い！これも買いたな

今日の前では、麗華さんがとても楽しそうに駆け回つてゐる訳で…。

「あーとは…ああーアレだ！」

まあ別に、彼女が喜んでいるならどんな場所でもいいのかなあ。なんて思つてているのだが…。

「あと…あーこれも安いー……すげーな…

でもや…！」。

「あー砂糖安い…ですが特売日は違えよな

あの…スーパーなんだだけじゃー…?

「あ? ビーしたタクナリ。ボーッとしてる?」

「こやいやいや。いやいやいやいや…え? ……ちよ、ええ! ?」

「落ち着きなさい。ここをそんなに荒れてる「みへい流で」

「慌てるつづーか、驚いてるつづーか、驚いてるつづーか…」

「いや、だから落ち着けって。ホラ! 深呼吸!」

麗華さんが『スー…ハ…』と呟つに呟わせて、ゆっくり深呼吸する俺。いくらから落ち着いたので、ゆっくりと麗華さんに尋ねてみる。

「だ、だつて俺デートでスーパー来たの初めてなんですが」

例えば、

『これから、おまえの家行つて手作り夕御飯でも食べに行こつかない』  
『んもう、いきなり何言つてるの? ?』  
『『『』』』  
『『』』』  
『『』』』  
『『』』』  
『ハンバーグ…かな。そのあとは、もちろん。ね?』  
『…………もう。じゃあ今から材料買つてこいつ?』 みたいな流れで買いに行くならわかるんだけどさ。  
でも、ね? だってホラ……。

「タクナリ……おまえ、かなりキモい。全部顔に出でる」

「誰がお前をやめたか？」

「いろんな意味でがっかりだよな。まず一番の問題は、妄想力が中学生並みつつーことがさ…」

「うわああああいーーー！」めんなさい！俺が悪かったです！」「

「しかしタクナリがそんなこと考えているとはなし。そーゆーことお望みなら、タクナリの為に裸にエプロンで

「ほんりとに…ほんりといいですからーおなじと調子のひた  
だけですからー」

「ちうか…。いや、別に無理をしてるわけじゃないんだぞ?」

「麗華さんが無理してゐるしてないじやなくて、俺が無理なんです！」  
この話題が耐えきれないないんですよー。もう、この話題やめません  
？ね！やめましょう！！今すぐにーーー！」

「はいはい。あー楽しかった。タクナリいじりも楽しいな」

心底樂しそうにいつた麗華さん。そりやそうだろう。終始ずっと  
ニヤニヤしてたもん、この人。

しかし、この人に弱みを握られたら、本当に終わりだな……。気をつけよう、うん。

「じゃ、タクナツのためにも、Hプロン買わなきゃなあ……」

もつ握られてたああーー！

しまつたあーあれば完璧な弱みだーー！

「れ、麗華さん……この話は、もつ……終わ

「アイス」

『つ』といつ前に彼女は一つの単語を発した。それはこの時期になると、一度は食べるおいしいデザートで……。今この状況で、彼女の言葉を聞いて、なんとなく、といつかほぼ言いたいことはわかつた。まあでも、ここは聞き返すのが、自然な流れであり、暗黙の決まりなのだと思つので、薄々気付きながらもきちんと聞き返す。

「……はー？」

「この話題をやめてほしかつたら、アーンド、他の人と言われたくなかつたらパゲちゃんアイスおこれや」

やつぱりそんなことだらうと思つた。『アイスをおこるだけ』といつのは、随分と軽い内容なのが。

ちなみに、麗華さんが言つている『パゲちゃんアイス』とは、コンビニやスーパー等で、他のアイスと並んで売つてゐるも、ちょっとだけ格別扱いされている、あの値段が少しだけ高いという『ハーゲ○ダッツ』のことである。初めて聞いたときはかなり驚いたが、何回も聞いていれば嫌でも意味がわかるので、俺はもういちいちツツコまない。

「そんなことだらうと思つました。本当に好きなんですね

「もうヤバイな！アレは。神だよ神！！ネ申と書いて、神だよ！」

「それ、前から聞いてますから。」の間も同じ」と今回も繰り返してましたから！」

とりあえず、その『パゲちゃんアイス』を五つほど奢るとこついでこの話はなんとか落ち着いた。

俺としても、それだけでこの話を終わらせてくれるなら、ありがたい話である。

その後も、麗華さんはなんとも嬉しそうに値引をされている商品を、どんどんとカゴ入れていった。

なぜここに来たかったのか彼女に聞くと、今日はポイント一倍の日らしい。

なんともまあ…家庭的な人だ。

## 第6話・トートは計画的に~買い物編~（後書き）

第6話ですね。「6話目にして、もうトート?」思つ方がいらっしゃると思いますが、あまり寄り道をせず、スス~と進んでいこうと考えております^\_^まあ私は文才がないので(汗)遠回りしてしまつ可能性も大いにあります^\_^；暖かい目で見守ってくださると嬉しいです^\_^

## 第7話・時季違ひの恋の季節（前書き）

またまた更新が大変遅れてしまい、申し訳ございません。

## 第7話・時季違ひの恋の季節

「うすー！タクナリ。今日も金稼いでるかあ？」

「どうも。つかそれ、中年のオッサンが言いやうなセリフですよ  
『いいじゃねえかよ、別に。私がオッサンみたいなこと言つたら、  
世界が困んのか？あん？』

始まつた…。最近彼女は喧嘩口調にハマッいてるらしく、俺が何  
か言つと田舎ヤンキーみたいな屁理屈を言いながらキレるのだ。

彼女曰く『反抗期』らしい。

なぜ反抗期にハマッているのかはわからないが、多分気分か何かな  
のだろうと思つ。

「なあ、次の休みつていつ？」

「次は～今日、明日とやつて…明後日休みですね」

「オッケー。明後日な。じゃあさ、お前んち遊びに行つていい？」

「ああ、いいですよ。午後からなり平氣です」

麗華さんと『初デート』をしてから約2ヶ月後。

彼女はあれからよく俺の家に来ては、昼御飯や、掃除などの家事を  
してくれるようになつた。これは本当に助かる」とで、家事全般出  
来ない俺にとつてはすぐ嬉しい。

普通女性が、独り暮らしの男性の家に行くなんて、恋愛感情やら何やら生まれるのかもしれないが、なぜか俺達にはそんなことはないと思えていた。

まあ、やう言い切れる確実な理由がちやんとあるのだけど……。

## ピンポンピンポン

「いらっしゃいませ」

音に反応して、入ってきた客に挨拶をする。それを見た麗華さんは静かにその場から退き、俺と他人のフリをする。彼女も客が来るとその場から消え、客がいなくなると戻っていく。といつ一応の気遣いも見せていく。

「あつがといわれこましたー」

「なあなあ、今日は……いないのか?」

客がレジから離れて行くと同時に、元時計とヒヤヒヤと麗華さんが鳴ってきたり。

「え? なにがですか?」

「あいつだよ……。あの……ちひり」

「ああ、新田さんですか?」

「やつやつーーッタ、ーッタ」

「いつもみたいに、奥にいますよ」

「お、おお。じゃひょつとお邪魔しマース」

彼女が奥に入つていく姿を見送ると、自然にため息がこぼれる。  
そう、確實な理由。それは多分、彼女が新田さん恋をしている  
から。

先日彼女が僕の家を訪ねる時から、麗華さんは新田さんのことを  
気になつてゐるっぽいのだ。  
本人は隠してゐるつもりみたいだが、俺にしてみれば『氣付かない』  
方が無理な相談である。

先ほどの『分かりやすい』態度を、そう何回もされると他の人の  
恋愛に疎い俺でもすぐにわかつてしまつ。  
どうやら麗華さんはポーカーフェイスが苦手らしい。  
正直な話、なんだか寂しい氣もある。失恋とかの寂しさではない  
のだけど、なんだろうなあ……。

「お姉さんが遠くに行つちゃう感じー？」

「寿さんで、シスコンなんですか？」

「つおつー？」

俺が完璧に自分の世界に入つてゐるときに声をかけられ、心臓が  
飛び出そつになつたのをなんとか抑える。

声をかけられたほうを見ると、後ろに綺麗に真ん中で髪の毛が分け  
られた後頭部が見えた。視線を下に向けると、なんとも言えない冷

たい視線を俺に向けた、ちっちゃい女人がいた。

「ひ、春沼さん……」  
ハルヌマ

「トイレ掃除終わりました」

「お、疲れや、ます……」

ブレの無い通つた声で淡々と言つ彼女に、先程の驚きが一気にしほんでいくのがわかつた。

「にしてもまさか、寿さんがそんな人だつたなんて……」

「いや、違つんですよっ！？これは、なんといふか……心のすきま風の原因を語つたというか……」

「何言つてゐんですか」

彼女はまるで俺を心底馬鹿にしているよつにため息をついた。いや、多分馬鹿にしているんだろう。

「てゆーか寿さんて、お姉さんいたんですねか？」

「いや……お姉さん……つて言つたか、何ていうか……」

「ああ、従姉妹の川北さん、ですか？」

「あ、まあ……。そんなとこりうです」

「あの人。変な人ですよね。この前会つたとき、凄く礼儀正しい人

だと思つてたのに、やつさまでの喋り方つ。絶対猫被つてたんですね

春沼さんは、麗華さんが新田さんと始めて会つた日、つまり、俺の家を教えてもらつたときに一緒にいたらしい。

春沼さん本人から聞いたわけではないのだが、先程の春沼さんの発言や、麗華さんが『空気の読めない（つて言うのはどうかと思うが）女性店員がいた』。と前に言つていたことなどを考えると、その店員が春沼さんであることは明白だ。

「そんなこと言つちやダメですよ？ 彼女は親しい人には、自分が使  
い慣れている言葉遣いを使つていいんですよ」

多分……。

と、直ぐ様心の中で付け加えた。

一応麗華さんにフォローはしておいたものの、断言はできない。  
なぜなら当の本人（俺）が初対面で喧嘩口調だつたのを思い出した  
からだ。

「どうでしちゃね？ 僕にそうとしても、私はやつぱり常識がなつ  
てないつていうか、失礼な人だと思います！ 夜中にコンビニでギヤ  
ーギヤー騒いでいるだけでも迷惑なのに……。最初の頃は仕方なか  
つたのかも知れませんけど、今ならメールアドレスくらい、お互  
い交換しているんでしょう！ だったら、わざわざここに来なくとも、  
携帯で連絡すればいいじゃないですかっ！」

確かに、春沼さんが言つていることは正しい。あの一件以来から、  
またすれ違いが起きない様にと、俺たちはアドレスを交換していた。  
でも、毎日の様にメールするわけではなく、本当に必要なメールし

かしないのだ。だから、俺たちの『ミニアーケーション』をとる場所つて、必然的に『』が俺の家くらいなのだ。

だからと言つて、毎日のように俺の家に来ていたら、もうそれは『同棲』に近いようなものがして……。正直な話、そこまで一緒にいたくない。彼女とは、『』でだらだらと喋るくらいが丁度いい様な気がするのだ。

俺がそんなことボーッと考えてると、こきなりトーンが落ちた声で『それに……』と春沼さんが喋り始めた。

「それに、最近の川北さんの行動は寿さんが可哀想です」

「えつ？ 僕つ！？」

「はい……。だって最近は、親戚の寿さんを、放つとして、新田さんとのところばかり……」

ハハハつ。まさか、そんなことで春沼さんに心配されるとは。

「俺は全然可哀想なんかじゃないよ。そりや寂しくない、なんて言つたら嘘になるけどね。の人と一緒にいると楽しいから、『ああ、もうあんな風に喋れないのかー』とか思うとね。でも別に、そんなにシコツクな訳でもないし……。これがまた、俺が麗華さんに特別な感情を抱いていたなら、話は変わったかもしねいけど……」

「…………は？」

「いや、は？って

もつと、じりり……しんみりした空氣にしてくれつたて……。ちなみに、今の春沼さんの表情は、眉間にしわを寄せ、『おまえ……何

『言つてんの?』みたいな顔をしてくる。

「え? だつて寿さんと、川北さん……。付合ひて、いるんじや…」

…「」

今度はいつちが『は?』である。

「春沼さん。なんの勘違いしているのかわかりませんが、俺と麗華さんはそんな関係じゃないですよ?」

「ええつー? そりなんですかつー?」

驚きのあまりなのか、俺の胸ぐらを掴んで、ぐいっと顔を寄せてくる。

「うふ……。ぐるじつ。春沼さん、離してーーー」

「え? ……キヤアつーーー」

もう言いながら、今度は俺を突き飛ばす。女性の力なので、転ぶまではいかないのだが、多少よろめいた。

「うとと……。はーるーぬーまーせん~。落ち着いてくださいーーー。質問があるな? ひりやんと答えますからーーー」

「うー、『めんなさ』。つに、取り乱しちゃつて……」

「まあ、いいですよ」

春沼さんが『ふつ』と、息を吐いて落ちていたのを確認して、俺

は先程の質問に答えた。

「さつさも、言つたけど俺と麗華さんはそんな関係じやないんです。たまたま近くに住んでいて、たまたま口で知り合つた、言つてしまえば『友達』なんですよ」

「あ、そつ……。そつかー。ハハ、なんだー。そうなんですかー」

俺の答えに納得がいつたようで、段々もとの春沼さんに戻つてきた。

春沼さんがあんなに興奮している姿を見たのは初めてなので、かなり驚いたのだけど……。うーん、春沼さんもあんな所があるんだなあ。しかし、なんだか春沼さんが嬉しそうなのは、気のせいだろうか？

「え？ じゅあ……『口で知り合つた』って、川北さんは親戚なんじゅ……」

やばつーつかり言つてしまつた……まあ、言つてしまつたものは、しょうがないか……。

「実は……従姉妹つて言つのは嘘、なんですよ」

「やつぱりー！ そんな感じはしてたんですねー！ だつてあの時と今じゃ全つ然態度違いますもんつ」

「あ～……ハハハハハ」

苦笑いしかできない俺。だつて猫被つている姿を、見ていないの

だから、なんとも言えない。

「あーせこせこ。じゃあねーーー」と。じゃあ、またなー

「あ、麗華さん。もうここんですか？」

奥から頭をボリボリ搔きながら出でた麗華さんと、声をかける。  
その行動は女性としてつかと思つが……。

「おーおー。んーもっ報告は終わったしなー」

「報告……？」

「こんちや、気にすんな

そんな会話をしつづけると、春沼さんが俺をドンッと押し退けて、  
麗華さんの所へ近づいた。

「川北さん……」

「ああ？」

ちよつ。麗華さん……。なにもそんな面倒口調で……ほひほひ～

…春沼さんひつと後退りしちゃつてゐしつ。

「つーーーん、そんな口調でも私はめげませんよーーーめげませんつ

「なあ、タクナリ。」こいつ何がしてえんだ？

「こや……俺もよく……」

「川北さんつ……」

「だからなんだよ」

「あんまり、寿さんに迷惑かけないでください……。」

「はあ？」

「し、失礼しました……。」

「え？ ビリコリ」と？

と言ひ、俺たちの疑問には答えることはなく、春沼さんはまるで頭から煙りが出そうなくらいの勢いで奥へ入っていった。

「なあ…… タクナリ」

「なんですか？」

「あいつ誰だ？」

「ええつー。？」

その後の話。

「「うるさい人がいなくなつたと思つたら、またうるさい人が来たー……」

「「うるさい、うるせーですー。新田さんーー。」

「いやだから、うるさいのはアンタだからね」

「恐かつた……恐かつた……心臓が飛び出るかと思った」

「ヤクザでも来た？」

「私に」とつては、ヤクザよりも苦手ですっ。あああああ、私はなん  
てことおおおおーー！」

「とうあえず、落ち着こつか

「落ち着いてますよつー落ち着いているから、今後の事を考えてす  
つつつついく後悔しているんじゃないですかーー！」

「ふーん……。なんとなくわかった。面白いねえ。人の恋愛って」

「は？なんか言いました？」

「んにゃ、なーんにも言つてましょん」

## 第8話・人の名前は間違えないようこじましょう（前書き）

今回、会話文多めです；；

もし見にくい、伝わりにくいやつでしたら指摘お願いします。  
加筆させていただきます^ ^；

誤字・脱字報告、並びに感想・評価お待ちしております。

## 第8話・人の名前は間違えないよひにしまじょう

「つおーい。出来たぞーい。起一きろー」

「うつー・ぐはつー・ちよつーれ、一麗華……さんつ……うつわ。  
いい匂い……ぐおー」

会話文だけでは、一体どんな状況か理解できない人が、ほとんど  
だろう。

簡単に説明すると。彼女はいつも如く、夕御飯を作りに来てく  
れたのだが、俺は何故か突然の睡魔に襲われ、仮眠をとっていたの  
だ。料理が出来たのか、彼女が俺を起こしてくれたのだが、その起  
こし方が全て蹴りという、なんとも彼女らしい起こし方だった。

「しょうがねえだろー。両手塞がってるんだから」

確かに右手にしゃもじ、左手にお椀、となんだか主婦のような格  
好をしているが、でも蹴りつていうのはどうかと思つ。

つて……まだ蹴つてるし……

「ちょつ、いいつ、加減！蹴るのつ……やめつ……

「早くしないと、『ご飯冷めてしまつんですけどー？……あらへ……  
つざやあ……』」

その瞬間、今まで俺の腹を蹴つていた麗華さんが、バランスを崩  
し今までとは違うところへ蹴りを入れた。

しかも、転げないように蹴つていた足を踏張るよつとしたため、俺に痛恨の一撃が加えられた。

「~~~~~」

「あ、悪い。まさかのクリティカルヒット？」

「まさかの…………クリティカル…………ヒット、です」

「いやー、すまん、すまん。まだ使えるよな?」

「た、多分、……」

「試すか?」

「アホか!――」

『』にあたつたかは、想像で頼む。

と言つた彼女、この前の待ち合わせの時といい、大事などいつもばかり攻撃している気がする…。

「たまたまだよ、多分」

『』や『』彼女は人の心が読めるらし…。

「こつもすんません。『駆走様でした』

「はいれー。今日味付け濃くなかったか？」

「やうですか？そんな感じはしなかつたですか？」

「マジですか。じゃあタクナリは味が濃い方が好きなんだなー」

なんて他愛もない話をしていると、麗華さんがいきなり『んあ？』  
と声を出し、辺りをキョロキョロと見回した。

「ん？どうしました？」

「なあなあ。なんか、声聞こえねえ？」

一瞬背筋が寒くなる。幽霊の類いが大の苦手、とこつ號ではない  
が、そう言わるとそつちの方向へ考えてしまつ。そんな俺の気持  
ちに応えるように、麗華さんが付け加えた。

「いや、そういうのじゃなくて、なんか騒いでるやつーか……

その声を聞いて、思い当たる事がある俺は女堵の息を漏らす。と  
同時に、麗華さんに説明した。

「ああ、多分高校生の奴らですよ。つたぐ、あこひら」

「なんだ、知り合いか？」

「こや、まあ。あこひら、時々あそここの公園……ほり、このマンシ

ヨンの真向いに、公園があるでしょ。そこで騒いでるんですよ。一度注意しに行つたんですけど、なんかそれから向こうが慕ってくれて。後輩みたいな感じです」

「ほーっ」

意外、とでも言つよつうな顔で俺を見る。そしてそのまま固まつた。その瞬間俺は、とてもなく悪い予感がした。だつて見えてしまつたから。彼女頭の斜め上辺りに、『ピカーン』と光る電球マークを。彼女が電球マークを出すときは、決まって何かを思ついたとき、そんでもつてその閃きは、必ず俺もセットで巻き込まれるのだ。

「ねえ……」

麗華さんの顔がグッと近寄る。

「祭りに参加しようぜ」

「はあ……」

「なーにそんな溜息ついてんだよ。楽しい方がいいダロ?」

「確かにそうですねけど……」

別にいいんだけどね。いつもお世話になつてている分、なるべくこうつことお付き合つて行きたいと思つていたし。

「でも。俺達は、麗華さんの提案で真向かいの公園に向かっていた。  
麗華さんが、その高校生達と話してみたいと言い出したのだ。

「でも、本当にひいて、生意氣なやつらですよ？」

「生意氣の方が話しやすいだろ。大丈夫、大丈夫。これでも年下には懐かれるほうなんだよ」

「どうですか……。なら良いですけど」

でもやはり気持ちに乗らない。なんてつたって、あこがれに会わせる訳だからなあ。

そんなことを話していると、公園の中で騒いでいる声が、先ほどより大きくなつた。

見ると彼らは、5～6人で花火をやつしているらしい。

「あれ？ 拓也さんじゅん」  
タクヤ

「え？ ホントだ拓也さんだ」  
タクヤ

「どうしたんですか？ 拓也さん」  
タクヤ

「どうした、じゃねーよ。うわせえんだよ、おまえ。あと俺の名前タクナリだから！」

「こうひらめ打ち合わせでもしていたのか？」

「あ、すんません。拓也さん」

「以後気をつけます、拓也さん」

「細かいっすね、拓也さん」

右耳に付いてるピアスが目立つ男が小さな声で呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

「人の名前間違えるのがいけねえんだよーーー！」

「つーか、俺らそんなうそかつたすか？」

ピアス男が俺の意見をまるつきり無視して聞いてきた。

「あーもつ、つるせえ、つるせえ。俺のマシンションまでおまえらのバカ騒ぎが聞こえたわ」

「いやーすんません。俺ら拓也さん大好きだからなあ

はあ？

「なに気持ち悪い」とつってんだ、おまえら

「俺らの愛の叫びが拓也さん呼び寄せやつたんだよな

「その通りだな、間違いねえ。だから拓也さん現れた訳だ

「だつて俺ら拓也さんのこと思いながら花火してたもんな

やつはつといこつらは納得したよつて『やつだ、やつだ』なんて  
頷き合つてゐる。

「あると……アレか。あんたらはタクナリのことを思ひながらも、  
いい女いねーのかなあ。つて思つてたつてことか」

今までずっと黙つていた麗華さんが、腕を組ながら近づいてきた。

「うわうー、誰つすか！？ 拓也さん」

「いやーまあ、この人はアレだ」

「彼女つすか？」

「いや、違う違う」

「あー彼女なんすね」

「人の話聞いてるか？ 日本語通じてますか？」

「こしても拓也さんの彼女。おっぱこでつかにっすねー」

明らかにいやらしく目つきで、麗華さんの体を見る高校生の一人。

「わー、こりうのがあるから麗華さんに会わせたくないなかつたんだ。こじつらは、男同士で話すよつな下ネタを普通に男女関係なく、  
発言してしまつのだ。」

つたぐ、こちしがフオローしなきやならねーんだぞ。

「あー本当だーめつちゅだけえーつか超やわらかそう

「いや……あの麗華さん。」*むらわ* 「

「なんだおめえら。」*こんな乳も見たことねえのか* 「

え!?

そんな言葉を発したのは、意外や意外。麗華さん自身だった。

そんな俺の驚きなんて知らずに、彼女は自分の胸を揉む。

「見たことねーっすよ、マジ。何カッブなんですか?」

麗華さんの態度に気を良くしたのか、わらわらと彼女の周りに高校生が集まる。

隣にいる彼女は、ガハハハハなんて呑気に笑っているのが、また驚きで。

でも麗華さんが一体どんな受け答えをするのか、少し楽しみなので、俺は見守ることにする。

「いやー、皆若々なあ。そんなに知りたいか?」

興奮氣味に「ククク」と頷く彼ら。

なんだか、男としてその姿は情けないぞ。高校生達に今、自分の意思表示をするための犬のような尻尾があるなら、多分風が起るんじゃないかってくらい、ブンブン振り回されているだろ?。

「ハツ、教えるかハゲ」

あ、尻尾止まつた。

一瞬のひきつけながられていく高校生達。

そりゃそうだらう。麗華さんがそんな簡単に自分の胸のサイズを言ひはずが無い。

「それに言わないで妄想する暇つが、やりがいがあるつてもんだら。オナ」

「ストオオオオップ！！」

今まで見守つて来た俺だが、今麗華さんがサラッとする「ここ」とを言おつとしたようなきがあるので、直ぐに彼女の口を抑える。

「ふあにすんだおお、ファクナリ！」

「ダメです、麗華さん。女人がそんな軽々しく下ネタを言つたら。このお話は、そういう露骨な表現を避けているんです」

「言つてる意味あ、よくふあかんねえよ」

「え？ そんなに言つちゃダメなんすか？ オナ」

「どうやあー」

「ぐはっ……ー」

またもや禁止ワードが出しだつたので、そこにつき裏拳を一発食らわせて、大人しくさせた。

「あの拓也さん。なんだか随分と扱いがひどくないですか」

よく見ると殴ったのは先ほどのピアス男だった。

なんかさつきから、こいつがよく絡んでくるなあ。

そいつが起き上がりながら抗議をしたが、そんなものは知らん。  
聞こえん。

ある程度高校生たちと話して、麗華さんが満足したようだったので帰ろうと床ろうとしたら引き止められ、『もうちょっとといってもいいじゃないですかー』なんて言われたので、特に様もなかつた俺たちはしばらくそこそこにした。

と言つても彼らと一緒に遊びふ訳でもなく、彼らが花火をやっている場所から少し離れたところのベンチで、その様子を見守つているだけなのだが。

「こしても、若えなあ。あいつら

「本当ですね。まあ俺も高校の時、あんな感じでしたけど

「へえ。なんかタクナリ、高校の時は悪かった。って感じだよな

「あー……授業中にお菓子食べたりとか?」

「あと授業中に寝たりとかな

2人で『小さいなー』なんて言いながら笑い合つ。

すると、高校生の軍団の中から、1人がこちらに向かって近づいてきた。

「うわ…。ピアス男だ…。

「おまえ、一緒にいなくていいのか?」

麗華さんが聞く。

「いやーなんか疲れちやつて」

「遊んでて疲れるつて、今の高校生そんなこと思うのか。俺なんかの時は、授業中とバイト以外の時は疲れたなんか思わなかつたぞ」

「俺、そんな若くないつすよお」

「私よりも若いやつに言わると、嫌味にしか聞こえないな

「あー確かに」

「そんな意味じゃないですよーーまあ俺体力はあるほうなんですが、花火つてあんま好きじゃないんですよね」

「ふうん。私は好きだぞ、花火」

「麗華さんらしいですね」

「そうかな」

「俺も小さい頃は好きだったんすよ？他の事は率先してやんだけば  
なあ。ホラ、倉持クラサチとか体力無いのに、かなりはしつきてますし…」

「あ？誰だそいつ」

「何言つてんですか。倉持つすよーーー。」

「名前じゃなくて、特徴で言つてくれんねえかな？」

「もしかして…拓也さん、名前覚えてもらつてないんですか？」

「オイオイ、覚えるも何も、俺おまえらの名前なんて知らねえよ」

「ええー！？言つてしませんでしたつけ？」

なんで俺の周りには、自分の名前を言わない奴が多いんだらう。

「すると、アレか？タクナリは名前も全く知らねえのにこんな慕わ  
れていたのか？じゃあタクナリの田に田には、高校生の軍団にしか見え  
てなかつた訳？」

「ええ、まあ

「いじつらバカだなー」

あなたが言えないでしょう、全く。俺も最初あなたを、コンビニ  
の常連さんにしか見えてませんでしたよ。

「じゃあ折角なんで、覚えて下さいー！俺の名前だけでもいいんで

「ああ、わかった」

「俺の名前、前田<sup>タナカ</sup>つて言つんです……。」

「うわー……」

「なんすか、拓也さん」

「（元）に来てまさかの普通の名字だな」

「ああ。私も聞いた時思った」

「どういう意味ですか！寿だって一般的な名字じゃないですか！拓也さんの彼女さんだつて、まだ名前聞いてないけど普通の名前じやないんすか！？それこ、一般的のほうが覚えやすいでしょー…？」

「タクナリの名字は珍しい方じやないか？」

「ええ、そんなに見かけないですね」

「こや、でも小川くん。一般的な名前でもいこじやないか」

「田中ですっ。それに俺一般的な名字、否定してませるよー。一言もー！」

「やつだよ中田くん」

「惜しきー。田中ですっ。つーかタクナリさん、そこまでわかつていふんなひ、ひやんと呼んでくださいよー」

「「じめん、」」「めん。どうなかくん」

「意地でも田中と呼びたくないんですね」「ノホヤロウ」

「だつておまえさつとき名前間違えてるつていうたら細かえつて言つてたじやねえか。だから、別に一文字へりこ間違えたつていいだろ？」

「わかりましたよ。わざそんなりと聞こせませんよう」

「つたりぬーだよ」

「つて」とは他の奴らの名前も知りなじんすか？

「全く知らねえ。知らうとも思わねえ」

「うわー、タクナリくんだうだねえ」

「こやこいや彼女さん。拓也さんこつもあんな感じですよ。だから俺らちよつとびつべつしてるので。『拓也さんが敬語使つてる』って

「へえー」

む。何を「へえー」話してくるのだつて。田の前にてのひ内緒話されると、まあ……気分はよくな。

「「ノホヤロウ頼たま。そこで、」」「へえー」話なんてしないの」

「あー悪こ、悪こ。タクナリくさヤキモチやこさうもんかな?」

「ナヒコハシテ詰じやなこですナビ……」

「ヤキモチなんて拓せれと可憐こつすねー」

「ちよつと黙つてウテメー!」

パシッと田中の頭をたたく。

「……つてー!だから扱い違くなこですか?」

なんか言つていぬが、知らん。聞こえん。

## 第9話・動かした恋愛

「花火じょひせり」

俺があぐらを書いてテレビを見ていると、彼女は鼻息をふんふと鳴らしながらテレビの前に仁王立ちする。俺は、返事や詳細を麗華さんに聞くわけもなく、彼女の向こう側にある隠れてしまっているテレビをぼーっと眺めていた。

「ちよひとばかし時期が遅れたがそんなのは関係ない！」

そんなことはお構いなしにセリフに合わせ右足をじきっと足踏みする。

「やつぱりこいつ季節の行事には、ちゃんと参加しないひとつ思つんだよな

身振り手振りで自分の中の何かを表現しているらしい彼女。

「やっぱり来たか」なんて思いながら自分の頭を搔くと、「聞いてんのか！」とその頭を軽く叩かれる。

「まあ予想したことではありますね」

「なにが？」

「（）の前の高校生が花火やつてるの見てやりたいなーとか思つたんでしょ？」「

「おつかー」

何の意味なのかはわからないガツツポーズを決めている麗華さん。

ああ… もう花火やりたくてしょうがないんだな…。

「で? タクナリはやんのか? あん?」

ヤンキーが喧嘩を売つてくるような口調で聞い詰めてきた。彼女の言ひ方にはもう慣れたけど。

「まあ… いいんじゃないですかね? 今なんもやる」とないし

「つおっしーそつと決まればホレ、花火買いに行くぞー。」

「言つたと思えばもう玄関で靴を履きはじめてる。

「ちよ、麗華さん、慌てない! 戻つてきてくださいー。」

「なんだよ? 早く行け! せざ」

「いいから、ホラここに座るー。」

そう言つて麗華さんをソファーに座るように促す。

「なんだよ?」と、不思議そうに言ひ麗華さんに  
「だから、予想してたって言つたじゃないですか」  
と、言いながら花火がたくさん入つたコンビニ袋を渡した。

「…………え?」

「時期が時期なんで、もう売れ残つてるんですよ、花火。だから店

長に言つて安く売つてもらつたんですね

「マジかよ…さすがじゃんタクナリ！私、お前のそういう所大好き  
つ、ありがとうな！」

その瞬間誰かに胸を捕まれたように、きゅうつゅうつとなつた。久  
しぶりの感覚だ。いい歳をした男がこんなこと言つのもどうかと思  
うが、わかりやすく言えば、俺は今、「胸キュン」をした。

どんなに口が悪くてもこんな美人なのだ。そんな人に笑顔で大好き  
なんて言われるともう…そ…アレだよね…うん…。

破壊力抜群だぜコンチクショオオオオ…!!

「麗華さんみたいな美人に大好きなんて言われると、男なんてバカ  
なんだから勘違いしちゃいますよ？はつはつはつー」

心の中の悶えなんてものは一切出さず、あたかも流してゐるかのよ  
うに言つてる俺も相当バカだと思つ、ああ自覚してゐるぞ。

「気持ち悪いくらい爽やかなオーラを出してて、逆に気持ち悪いぞ」  
ハツと笑う麗華さん。自分のことを知らなすぎるのも程があるだろ  
う…。

「そんなことよりーわせーと始めようぜ、はつなっぴー」

軽く飛び跳ねながら言つ麗華さん。こいつはしゃいでる姿を見  
ると年上といつよつは妹を持つてゐる気分になる。

「そうですね、あの真向かいの公園でいいですか？」

「おう…つても…」れだけの量、2人じゃ余るかな…」

「結構ありますからねー、誰か呼びますか？あ、でも2人の共通の知りつていなか」

あまつた花火、大量に買い付けたからな。ちゃんと量も考えておくべきだった。

そんなことを考えていると、麗華さんが口を開いた。

「いるじゃん」

「え？」

「コンビニ仲間」

「キレーですねー。寿さんの所」

「……」

「ちょっとお、なんで反応してくれないのさー。あ、これ色変わる  
!-す!"いなー」

「あ、ああ……」

「なにー? 楽しくないですかー? 折角の花火なのにい

「……綺麗だなとは思いますよ。ええ、そりや花火は綺麗ですよね、夏の風物詩ですよ。と言つても今は秋になりかけていますけど。でもそんなちょっと季節が遅れてやるのも中々いいものですね。ええ、ええ。花火は好きですよ俺も。でもね、なぜ、何故？何故？」

「そりやつて興奮しないのー。もうちょっと落ち着いてー」

「落ちていますよ、落ち着いていますとも！でもね？なんで新田さんと2人きりで公園の端っこに縮こまつて花火をしなくちゃならないんですかっ」

「しようがないでしょー。君の『偽』従姉妹が帰つて来ないんだからー」

なぜ彼女がいないのか。  
なぜ男2人で花火をやつしているのか。

まあ簡単なことだ。

麗華さんが言つたバイト仲間とは、俺のバイト先の人たち。要するに、新田さんと春沼さんだつた。本当に奇跡的に俺を含め三人とも夜勤ではなかつたために、花火大会を開催することになつたわけだが春沼さんが少し遅れるということで、夜に女性一人は危ない！と言つて迎えに行つたのだ。

麗華さんが。

わかっている、本当は男の俺が新田さんが行かなきやとわかつているのだけれど、「俺が行きますよ」と言葉を言つ前に、彼女はもう春沼さんのところへ走つてしまつたのだ。

まあ駅からこここの公園はそこまで遠くないから大丈夫だろう、とい

「う」と今虚しくも男2人で花火をしてるのだが・・・・。

「なあに、寿さん。俺と花火がそんなに嫌なんですかー？」

「いやね、君と花火がいやとかではなくて、このシチュエーションが悲しそぎるんだよ」

ひざを抱えながら涙目で花火つて、親が見たらこれ泣くぞ。

「にしても、新田さんが来るとは思ってませんでした」

「え? なんでー?」

首をかしげながら聞く。普段ゆつたりとしているせいが、こういう言動はあまり気にならない。むしろ彼らしい行動だと思つ。

「いや、新田さん。こうこうの面倒くさいとか言つて参加しなさそうなイメージあつたので」

「うーん、まあ俺必要以上に人と関わるの好きじゃないし、無駄にお金使うのも嫌いだし、正直あのバイトもかなり面倒くさいとか思つちゃってるし、つうかそんな人間自体が好きじゃないんだけどー」

まさかこんなネガティブな発言が続くと思わずに苦笑いになる俺。

「でも、メンバーの中にちょっと気になる人がいてねー」

「気になる人?」

新田さんの目線が手元の花火から俺に移ると、心底楽しそうに笑

う。

「うん。

君の『偽』従姉妹

涼しい風が、手元の花火をかき消した。

「こしても、ま、まさかあなたが迎えに来てくれるなんて、おおおお思つてこませんでした・・・」

「ああ、期待してるようなやつじやなくて悪かつたな。私、ちょっとあなたと話したくてね」

花火大会を開催することになった私とタクナリな訳だが、花火の量が多いと言つことでタクナリのバイト先にいる一ツタと恋する乙女にも参加してもらうことになった。で、今その恋する乙女と一緒に駅から公園まで歩いてるわけだけれど・・・気のせいか、すげえ怯えられてる気がする。

「ははははは話!?ですか!?

「おひ、こやあ別に大したことじゃねえんだけどや」

「『めんなさい』の前はなんか喧嘩撃つけやつよつな」と言つて、生意氣なこといて、ほんつとうにすみませんう!...!..」

「あん?何の話だ?」

「本当に『めんなさい』なんかあればその場のノリとこいつか、ちゅ

つと自分のなかで盛り上がりちゃって、後先考へずここやつてしまつたことであつてええええええええ……ついて、え？」

「なーんの」と言つてんのかよくわからねえな

そういうながらニーッツと笑いつとこの女も安心した笑みを見せた。

「そういう私、あなたの名前知らないんだよね。なんていつの…？」

「あ、私。春沼と…」

「違う違う。私が聞きたいのは下の名前よ下の名前」

「下の名前ですか？ ゆうな、です。春沼ゆうな

「ゆうなかあ。お前本業は召喚士かなんかか？」

「はあ？」

「いや、わかんなければいいや

本当に分かる人だけでいいや、このネタは。

「そかそか、私は麗華つーんだ。川北麗華。よろしくな、ゆうなちゃん」

「はー、ゆうじくべですか。麗華さん」

「ひつひつ笑つたゆうなちゃんの顔は、すくなく可愛くて女の私でもキヨンと来てしまつようなどこかがあった。まあ私はそういう趣味

はないけど。

「ヒカル、麗華さん、やつを聞いてた話って？」

「ああ……タクナリの」となんだかどか」

「寿さん？」

「おひ、あこひ。 ハハハ、どんな感じなの？」

「ハハハ、麗華さんは見たことあるから分かぬと思つてますけど……」

「ああ、まあな。でも私と出会つ前とか、私がいない時とか

「出会つ前、今と変わつませんけど」

少し不思議そうな顔をしながらもしっかりと答えてくれる辺り、真面目な人なんだろうなあ、と思つ。見た目も男受けしそうな可愛らしい顔だし、性格もよそそうだし。まあちょっと猪みたいになつちまつところがあるみたいだけど。じつや、モテだらうなあ。いや、今もかな？

「うーん、なんかめっちゃヤンキーだったとか、やつこいつのないのか？」

「うそんな！寿さんは、優しくて真面目で、他人のことを考えてくれるし、いつも助けてもらつてるし、かっこいいし、笑つた顔とかがすこし可愛いかったり、失敗するといつも励ましてもらつたりして、逆に私は寿さんに対する何も出来てないつて言つた寧ろ迷惑か

けてばっかりで……。でもそのことをいつたら『眞にしうぎだよ』って笑つてくれて、それがまた可愛くて……つて！私はななななんの話を……。』

「うふ、やつぱつこの子は周りが見えなくなつたやつて突き進んじやう猪みたいな子だな。

なんだか可愛くなつて、笑つてると彼女に怒られてしまつた。

「なに笑つているんですか……。」

「いや、ゆうなちゃん可愛いなあと思つて。クックク

ああ、ああ。赤くなつちやつて。私が男だつたら確實に惚れていな、こりゃ。可愛いもんなあ。いじめたくなつちゃうね。

「笑わないで下をこい！……でも、なんでそんなこと聞くんですか？寿さんがヤンキーだなんて」

「いや、気にあるな。ゆうなちゃんは、タクナリのどんなといふが好きなんだ？」

「どんなといふと言つたら、そ、そりや全部…つて！私、寿さんのことなんか好きじゃありません……。」

またもや真つ赤になりながら否定するゆうなちゃん。妹を持つとこんな気分のかなあなんてぼんやり考へていると、彼女のほうから質問が来た。

「じゃ、じゃあ麗華さんは、今好きな人とかいるんですか？！？」

「私の？……そうだなあ。もうここ3年くらい、一人の男しか想つてねえよ。不思議なことに、どんなに離れても時間が空いても、違う奴と付き合つてもそいつ以外想えないんだ。未練がましいだろ」

吐き出すようにハツと笑つた。

「なんか、すゞく意外です」

「だらうつ？私でも意外だもんない。でもずっと好きなんだよ。しかも驚いたのがさ、そいつとこの前偶然再会してね」

「それって、もしかして」

「ああ。  
だよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7998e/>

---

コンビニから始まる妙な友情？

2011年5月25日05時30分発行